九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ルイス・キャロルの翻訳をめぐる風景

清水, 孝純
九州大学

https://doi.org/10.15017/16069

出版情報：Comparatio. 12, pp.99-114, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ルイス・キャロルの翻訳をめぐる風景

清水孝純

はじめに

ルイス・キャロルの二つの物語『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』は、翻訳という点では最も難しいものの一つではないだろうか。それはなによりも言葉遊びがこれらの作品の生命だからだ。これほど縦横無尽に言葉遊びに徹した作品はすくないのではないか。にもかかわらずこれほど世界中の様々な言葉に訳されてきているものも少ないというのも面白いことだ。勿論日本語での翻訳もじつに多くの訳書を数える。恐らく世界の中で、絵本とか児童向けにアレインジされた抄訳を除いて、完全な翻訳の形での翻訳がこれほど多く出され、なおだされつつある国はないのではないか。もっともこれはキャロルの書物には止まらず、シェイクスピアにせよドストエフスキイにせよ同じことが言えるのだが、しかし特にこの二つの作品の場合には、翻訳の多様性においてそのような傾向に拍車がかかっているのではないか。それはなぜかといえば、そこに訳者の情熱を掻きたてるものがあるからではないか。いわば、言葉遊びの翻訳というものが困難を感じさせればさせるほど、翻訳者の挑戦の意欲をかき立てるということがあるのではないか。いろいろな翻訳を読んで、そこに訳者の翻訳上の新しい工夫の数々を見ていると、なんとなくそんな思いがされてならない。というのも、キャロルの言葉遊びを盛るに、日本語の豊かさ、柔軟さが、絶好の受け皿になっているからであろう。

元来言葉の上のユーモア、しゃれ、遊びといったものは翻訳の困難なものである事はいうまでもない。それは夫々の文化システムのなかに深く根ざしているという構造的な理由によるものであると同時に、その時々の状況という移ろいやすいものに笑いの契機を有しているからだ。翻訳という観点からすれば、シニフィアンとシニフィエの結合のこれほど固いものはない。キャロルの翻訳の困難はこの点にあるわけだが、日本の翻訳者の挑戦は実に見事なものだ。言語系統の根本的違いにも拘らず、日本の翻訳者は挑戦を重ね、さらに挑戦し続けている。その挑戦はいかなるものか。それを具体的に翻訳の現場において確かめてみたいというのが本稿の狙いだ。

言葉遊びは、同音異義、両義性を利用する、あるいは文法上の約束を逆手に使う、また当時流行の歌謡のパロディーといった方法による、そういった具体例を幾つかの翻訳によりながら考えてみたい。そのような操作を通して、日本語訳の多様性、そこを流れる日本の翻訳者の工夫を考察する。この場合仏訳・独訳・露訳をも考察の参考にしたい。

テキスト

はじめに使用したテキストを掲げておく。以下、テキストをつきあわせて論ずることが多いので、そのほうが便利だろうと思う。

まず Lewis Carroll の原典については次のものを参考にした。

Alice's Adventures in Wonderland (1865), in Puffin Books, 1946

Through the Looking Glass (1872), in Puffin Books, 1948

『不思議の国のアリス』の翻訳については専ら文庫本に収録のものを使った。

角川文庫（福島正実訳、一九七五）

ちくま文庫（柳瀬尚紀訳、一九八七）

河出文庫（高橋康也訳、一九八八）

集英社文庫（北村太郎、一九九二）

新潮文庫（矢川澄子訳、一九九四）

旺文社文庫（多田幸蔵、二〇〇〇）

『鏡の国のアリス』の翻訳についても福音館のものをのぞいて文庫本を使用した。

新潮文庫（矢川澄子訳、一九九四）

角川文庫（岡田忠軒、一九五九）

福音館（生野幸吉、一九七二）

偕成社文庫（芹生一、一九八〇）

ちくま文庫（柳瀬尚紀訳、一九八八）

なお、引用文のそれぞれの訳者については注記せず、文庫名の略字をもって訳者名にかえた。次に仏訳、独訳、露訳についてだが、残念ながらこれらは一種類にしか当たることが出来なかった。

仏訳　Les Aventures d'Alice au pays des merveilles Ce qu'Alice trouva de l'autre côté du miroir ,Traduction de Jaques Papy, Gallimard, 1961

独訳　Alice im Wunderland, Übersetzt von Christian Enzensberger, Insel Taschenbuch, 1973

Alice hinter den Spiegeln, Übersetzt von Christian Enzensberger, Insel Taschenbuch, 1974

露訳 Приключения Алисы в стране чудес, Сквозь зеркало и что там увидела Алиса или Алиса в зазеркалье, Перевод Н. М. Демровой, Наука, 1978

以下、仏訳は folio、独訳は Insel、露訳は Nauka で示す。

最近は亀山郁夫氏訳の『カラマーゾフの兄弟』のブームもあって、その翻訳の是非について議論がかまびすしいが、そろそろ日本でもこれまでの外来作品の主要な翻訳についての総点検のようなものが始まってもいいのかもしれない。とはいって、僕がこのような翻訳論をてがけることになったのは、そのような風潮とは直接関係は無い。読書会で細かくキャロルの二つの物語を読んでいるうちに、邦訳の訳しぶりのあまりにもさまざまなのに驚き、比べてみることから、改めて翻訳というもの、そしてとくにこのような言葉遊びを核とした作品の場合の翻訳について考え始めたということだ。この場合、忠実な翻訳というものを期待することなどはできない。それはほとんど意味を成さないだろう。キャロルの言葉あそびの工夫を伝えるためには、それなりの創意工夫が必要となる。その点で、翻訳者自身多分に創作者でなくてはならない。従って、ここでの翻訳論とは、おのおのの訳者の創意工夫を原典とにらみあわせて、引き出してゆくことでなくてはならな

いだろう。そうすることによって、そこに受け皿としての日本語というものの豊かさ、可塑性というものも見えてくるに違いない。いずれにせよそこからあぶりだされてくるのは、結局のところ、一種の根本的な文化の深層における衝突なのだ。

ところでこの問題に関しては、先行の論文、著作がある。とくに楠本君恵氏の『翻訳の国の「アリス」――ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論』(未知谷、二〇〇一)はこの問題についてのもっとも系統的な研究となっている。楠本氏は日本における翻訳の状況について、史的にていねいにたどり、かつ共時的に翻訳の問題を扱っている。仏訳・独訳・露訳にも目を配って極めて周到なものといえる。ただ筆者としては、より共時的立場に立って、夫々の翻訳の内的メカニズムといったものを引き出したいと考えた。そこに貫かれている、文化的衝突に目をむけていきたいと思った。ここでは翻訳の優劣を問題にするよりは、翻訳の苦心、工夫、情熱というものを引き出したいと願った。勿論、最終的には翻訳の優劣、いわばその価値というものの判定に帰着するのであろうが、しかし、このような場合、そうしたキャノンを設定することからしてまず問題となるのではないか。ということで、とりあえずは、それぞれの翻訳家の手法、工夫といったものを浮かびあげたいと思う。

言葉あそびの形成

この二作品の生命が言葉遊びにあるということはいうまでもないだろう。突拍子もない幻想も、鋭い機知と、思いがけない洒落の不断の突発的使用によって、味付けがなされ、無限のニュアンスに彩られる。しかも翻訳の焦点はそこにこそある。楠本氏は『多言語に訳された「アリス」』の著者ウォレン・ウィーヴァーの分類を参照してその翻訳論を進めておられるが、その分類というのは次のようなものだ。その分類では他言語への翻訳の場合の問題点としては次の五項目があげられている。

A 詩　B 言葉遊び　C キャロルの考案した語またはナンセンス語　D ロジックを含む冗談　E 意味のひねり

この分類はより大きな視点からみてみれば、Bの言葉遊びという観点で締めくくれはしないだろうか。それを大項目として、そこにACDEの項目を組みいれればよいのではないか。というわけで、筆者としてはそれらを参照しつつ、その言葉遊びの手法を筆者なりにまとめてみた。

I　文法上の間違いを利用して

アリスはうさぎの穴に落ち込んで、体が伸びたりちぢんだり、まったく予期しない体験にあう。第二章の冒頭はその奇妙な体験の驚きから始まる。キャロルの工夫は、アリスの言語感覚が瞬間的に撹乱され混乱したことを、彼女の文法感覚の錯乱によって示すことだった。丁度、磁石が激しい打撃を与えられると、一瞬、磁気を失う。そのような言語の瞬間的混乱は誰しも体験するところだろう。

"Curiouser and curiouser" cried Alice (she was so much surprised, that for the moment she quite forgot how to speak

good English…A・W/II 33)

説明するまでもないだろうが、形容詞 curious の比較級は more curious でなくてはならない。ここでは混乱のまま思わず文法的にブロークンな比較級が重複されることで、ますます奇妙と強調されているわけだが、キャロルはさらにアリスの言語規範を撹乱することで一層驚きを強調した。驚愕の叫びは一語によるほうが自然だろう。More curious では迫力にかけるのではないか。そこにアリスは瞬間的に自己流造語の変則変化を選んだと言うわけだ。これは言語規範ががっちり脳のなかに出来上がっていない少女にふさわしい言語感覚ではないか。面白いことに、このアリス流変則変化はよく使われているというのだ。もちろんこの箇所を踏まえた冗談からだろうが、しかし、アリスのこの勝手な変則流文法にもそれなりの真実があったということなのではないか。ところでこの翻訳ということだが、比較級など持たない日本語では、そうした言語の規範の侵害という点で、アリスの驚愕の甚だしさを表すことはできないから、他の表現にかえる、つまり驚きを強くあらわす言葉を使うしかない。ただこの場合、言葉のシラブルをかえるという工夫をしている訳者もいる。

(角) 変てこりんなの、おかしいの！

(ちくま) 奇妙れてきつ！奇妙れてきつ！

(河) ますます、妙だわ、ちきりんよ！

(集) てこへん、へんてこ！

(新) へんてこんて、へんてこんてえ！

英語と共通する言語構造を持つ仏語、独語、ロシア語の場合はどうか。

De plus - t - en plus curieux!

これが仏訳だが、通常の表現に t という発音が入っている。仏語は比較級はあるが、一般的に plus をつける。語尾に er をつけるということはない。そこで plus を形容詞の前につけるしかない。しかしそれでは文法的侵害にはならないので、なかに t をいれて、補ったわけだが、大体こういう驚きの表現としては一語であるべきで、合成的になったら、言葉の衝撃力は弱まる。その点では、比較級の形成において形容詞語尾に er をつければよい独語は楽と言えるが、しかし三音節以上の形容詞には more を前に置くという規則はないから、この場合はやはり工夫がいる。そこで独訳者は ulkig という言葉をとり、u を ü に換えた。

Ülkiger und Ülkiger!

ulkig はヴァーリヒ独語辞典によれば、滑稽という意味だが、口語的には「奇妙な」という意味を持つと言う。元来が低地ドイツ語からでてきたもので、学生語として使われたものらしい。それをさらに発音を間違えさせる、そんなところに独訳者の工夫もあったようだ。

ではロシア語ではどうか。

Все страньше и страньше!

英語の curious はロシア語では **странный** だが比較級は **страннее** になる。**Страньше** というのは言うまでもなく誤りだ。**Большой** の比較級 **больше** などの変化が混入したものか。

いずれにせよ、仏語・独語・ロシア語の訳者もそれぞれに工夫

している。

II　意味を二重に掛けた言葉遊び

ひとつの言葉に二重の意味を与えるというのは、一般的にいっても相手を愚弄する、茶化す、手玉に取る、皮肉るといったさまざまな話術において用いられることだろう。キャロルにおいてももっとも多用されている手法だ。そのなかでも傑作なのが、「ウミガメモドキの物語」のウミガメモドキが自分の受けた教育を自慢するところだ。そこでは、ウミガメモドキらしい海の中で受ける教科が人間社会の初等教育と重ねられている。それによっていわば、初等教育がパロディー化されているといっていい。なお注意しておきたいことは、ウミガメモドキ（Mockturtle）というのは全く亀の呼称ではないということだ。mockturtle とは にせのスッポン・スープで、子牛の頭のスープだそうだ。キャロルのふざけ心は料理の名前を実在の動物名にしたことだ。トランプのカードも手足を持って動くこの世界では、料理の名前が動物として動き回っても一向に差し支えはない。ただこの場合は、「にせ亀」という名前なので、真実と虚構の逆転したこの世界にはふさわしい名前といえる。さてこの動物が自分の教育を自慢していう。

"Reeling and Writhing, of course, to begin with," the Mock Turtle replied; "and then the different branches of Arithmetic — Ambition, Distraction, Uglification, and Derision."「もちろん、まず始めによろめき（読むこと）・のたうつこと（書くこと）、とウミガメモドキは答えた、それから算術のいろいろ、つまり野心（足し算）、気晴らし（引き算）、醜悪化（掛け算）、それと嘲笑（割り算）」（A・W/IX 127）

ここでも Reeling（よろめく）=Reading（読むこと）、Writhing（のたうつ）=Writing（書くこと）というように、おもしろく重ねられている。モック・タートルの自慢は、海に棲息する動物としての読み書きいわば基礎教育も受けているということを裏側からいっている。ただ海の動物だからそれは「よろめき」とか「のたうち」というものになるというところに滑稽さが潜む。このように、ちょっとした綴の変更で全く異なった意味になる、これは日常的に体験するところだ。そうした機微をキャロルはうまく利用した。しかし訳語となるとこれまた極めて難しい。まず邦訳では英語に倣って、ふたつの意味が重ねられた訳語にする。

（河）酔いかたとかみかた
（集）飲み方、炊き方
（新）酔いかた掻きかた
（旺）よろけ方と、もがき方

いずれの訳語も読み方と書き方をそのなかに含んでいる。勿論、意味がずれるのは仕方がない。ただ旺文社の訳はかなり工夫しているといえるが、それでも「よろけ方」から「読み方」を連想させるのはやや苦しいというべきかもしれない。角川文庫のものは、ルビを振ることで、この困難を回避しようとするが、ルビ自体、ちょっと解読困難ではないだろうか。

（角）よろめき方（リーリング）にもだえ方（ライジング）

変わったのではちくま文庫のもの。これはいっそのこと不可能

への挑戦は放棄して、搦め手から行こうというわけで、いわば英文のこころをとって訳すと言うもの。

（ちくま）海洋感字の読み書き

海洋感字は海洋漢字のもじり、海洋漢字は当用漢字のもじりと言う具合に二重にもじりを重ねているところに工夫がある。もちろん、原文の意味からは大きく離れるにしても、そこに一種の知的遊びをもりこめればいいというわけだ。それでは仏語、独語、ロシア語ではどうか。

まず仏訳の場合 **rire et médire** となっている。**rire**（笑う）に **lire**（読む）をかける。**médire**（悪くいう）に **écrire**（書く）をかける。しかし、これでは海の動物らしい基礎教育というニュアンスは全くなくなってしまう。ところで独訳だが、これはどういうわけだか解らないが、原文とはかなり離れてしまっているようだ。

独訳は **das Grosse und das Kleine Nabelweh** だが、正直言ってこれはよくわからない。直訳すれば、大きい臍の痛みと小さい臍の痛みということだが、さっぱりわからない。独訳の不可解さはその次にも続く。その点についてはすぐあとに触れる。

Чихали и Пишали

これは露訳だが、ここでは **Чихали**（くしゃみをした）に **Читать**（読む）と、**Пишали**（不平を言った）に **Писать**（書く）がかけられている。この場合でも仏訳と同じ問題がある。さてこの読み書きの問題に続いては、いわゆる日本語でいえば「読み書き算盤」の「算盤」に相当する言葉がくる。

Ambition, Distraction, Uglification, and Derision.

これは容易にわかるように、**Ambition**（野心）には **Addition**（足し算）が、**Distraction**（気晴らし）には **Subtraction**（引き算）が、**Uglification**（醜くすること）には **Multiplication**（掛け算）が **Derision**（嘲笑）には **Division**（割り算）が掛けられている。なお、**Uglification** という言葉は、**Beautify** から **Beautification** がつくられているように、**uglify** から創られたものだ。**SOD** によれば一八二〇年が初出というから、比較的新しくつくられた言葉らしい。**Beautification** のほうは一六世紀に初出が遡る。また **uglification** という名詞が登録されていない辞書もある。小生所有の研究社の新英和大辞典第四版にはない。従って、造語のように響いて、機知を響かせることもあったろう。算術を背後に暗示させるこれらの言葉はそれなりの意味を持っているのだろう。こうした二つの言葉の共鳴は偶然的なものだろうが、基本的教育が野心、気晴らし、醜化、嘲笑というのはなかなか皮肉な意味を持っている。ここでもシニフィエとシニフィアンの結びつきが強固なので翻訳は非常に困難と言える。では邦訳ではそれらの困難にどう対処したか。

（角）野心算（アンビション）、失意算（ディストラクション）、台無算（アグリフィケーション）、嘲笑算（デリジョン）

角川文庫のこの翻訳では算をそれぞれに付して、かろうじて算術に係わる語であることを示している。そして英語をルビにして補っている。ちくま文庫は相変わらず、大胆に変換した。ここでは必ずしもいわゆる算術四則にこだわらず、数学一般に拡大している。

（ちくま）海程式（かいていしき）、釣亀算（つりかめざん）、因数分海、侮数計算（ぶすう）

海程式は海底と方程式を結びつけたもの、釣亀算はいうまでもなく鶴亀算のもじり、因数分海は因数分解、侮数計算は分数計算のそれぞれのもじり。そしてそれぞれに皮肉なニュアンスをこめている。重要なことは、言葉遊びが仕掛けるユーモアにある以上、どんなにかけ離れて見えようとも、ユーモアの創出に成功していれば可としなければならないだろう。とにかくこのあたりの邦訳者の工夫は凄まじい。

（河）イイコノワタシ算、ワルイコノソウシキ算，イッパイヒッカケ算、クルクルメガマワリ算

まあなんという、訳者自身の言葉遊びか。タシ算・シキ算・カケ算・ワリ算をたくみに織り込んで言葉を作っている。意味も皮肉をもりこんで面白い。次の集英社文庫のものはこの河出文庫版と同工異曲といえるが、大体においてお酒に連想づけている。

（集）だし算、御酒（みき）算、ひっかけ算に水わり算

新潮文庫版はなかなかの工夫を見せている。

（新）大志（タシ）算、扇（ヒキ）算、見せカケ算、よワリ算

野心を大志と訳し、タシとルビでよませたのは成功しているといえよう。しかし成功はそこまでで、以下は原典から離れてしまう。ここでいっそのこと、算術四則などにこだわらずにいこうというのが、次の旺文社文庫版か。算術の四則からは加法、減法の法を方としてとって、あとは意味だけにこだわる。

（旺）のぞみ方、はらし方、ばかし方、なぶり方

フランス語、ドイツ語、ロシア語は日本語に比べれば楽なはずだ。仏語はほとんどそのままでいい。

(folio) Ambition (ambition), Distraction (Soustraction) Laidification (multiplication) et Dérision (division)

独語はこれまたまったく原典とはかけ離れた翻訳へと彷徨い出る。一寸そこらあたりを引用しよう。原典ではウミガメもどきが自分は必修科目だけは受けたというのをうけて、アリスがその必修科目というのはどんなものかと聞く。それに対しての答えが算数四則だったのにたいして、独訳ではつぎのようになっている。

Deutsch und alle Unterarten — Schönschweifen, Rechtspeibung, Sprachelbeere und Hausversatz

この独訳においては、原典の「算術」が「ドイツ語と全ての亜種」に変えられている。Schönschweifen（美しく反らせる）は Schönschreiben（美しく書く）、Rechtspeibung は Rechtschreibung（正書法）にでもなるか。しかし Sprachelbeere というのはよくわからない。Beere というのは漿果、いちごやぶどうなどのことだが、言葉の漿果とはなにか。さらに Hausversatz とはなにか。Versatz とは質に入れることだから、これは家を質に入れるということなのだろう。このことはこのあとのアリスとの対話にも出てくるのだが、全く原典からは離れている。

さてこの独訳の勝手気ままなやくしぶりに圧倒されて、ロシア語訳に目を転じると、ロシア語訳ははるかに忠実なのにほっとする。

(Nauka) Скольжение, Причитание, Умиление и Изнеможение

ここでСкольжение（滑ること）はсложение（足し算）だし、Причитание（号泣）はвычитание（引き算）であり、Умиление（感動）はумножение（掛け算）Изнеможение（疲労困憊）はделение（割り算）となる。なおロシア語訳にはこのところでも、欄外に言葉遊びについて丁寧な註がつけられている。

なお亀もどきの言葉遊びは学習の学科をめぐって続けられる。

B **"Well, there was Mystery," the Mock Turtle replied, counting off the subjects on his flappers, "---Mystery, ancient and modern, with Seaography: then Drawling---the Drawling - master was an old conger-eel, that used to come once a week: he taught us Drawling, Stretching, and Fainting in Coils（A・W/ IX 127）**

ここでも訳は実にさまざまだ。まず Mystery, ancient and modern（神秘それも古代と現代の神秘）は History（歴史）をふまえていっていることは明らか。だが訳はどういうわけか、さまざまな訳が現れている。

（角）古代秘密と現代秘密（ちくま）古代と近代の礫史（河）古代の溺死と現代の溺死（集）古代、近代ミステリ（新）古代と現代の霊奇史

礫史、溺死、霊奇史には歴史が踏まえられている。そこに訳者の工夫もあったのだ。

仏訳はどういうわけか、**mystery** が **ivoire**（象牙）になっている。

(folio) Ivoire Ancien et Ivoire Moderne

フランス語で **mystery** は **mystère** だから歴史 **histoire** と音がかけ離れるので、**histoire** と音の近い象牙（**ivoire**）を選んだものか。ただこの象牙という言葉から歴史が連想されるだろうか。さて独訳だが、この場合も大きく離れる。

(Insel) Erdbeerkunde mit und ohne Schlagrahm

これは「あわ立ち生クリームつきの、またそれのないいちご栽培法」とでもなるか。いずれにせよ原文の意味はまったくここからはうかがわれないといっていい。

(Nauka) Древней Греции и Древнего Рима

ロシア語訳では **mystery** を **рифы**（暗礁）と訳し、続けて「古代ギリシャと古代ローマ」と訳している。これは **рифы** に **мифы**（神話）をかけたものだろう。その連想で「古代ギリシャと古代ローマ」がでてきたというわけだ。

さて学習科目のひとつ **Seaography** だが、この言葉はキャロルの造語だろう。**Geography**（地理）のもじりであることは明らかだ。—**graphy** は記述的学問を示す接尾辞だから、ここでは意味としては海の様相を叙述する学問という意味だ。簡単な言葉だが、ここでも邦訳は多様だ。

（角）海理学（シオグラフィ）（ちくま）海理学（河）世界チリヂリ（集）海底地学（新）汐理学（シオグラフィ）

一方仏・独訳は英語の **sea** をそのままかえたもの。フランス語なら **mer**、ドイツ語なら **See** をもってくればよい。

(folio) la Mérographie (Insel) Seeographie

露訳は「海」のかわりに泥を持って来た。

(Nauka) Грязнописание

泥沼学とでもいおうか。

さらに電気ウナギがおしえてくれる学科 **Drawling・Stretching・Fainting in Coils** についてだが、Drawling（母音をのばしてゆっくり話すこと、形容詞ではのろのろした）は Drawing（絵をかくこと）のもじりだ。以下ずっと絵画に関するもじりの言葉となっている。そこで Drawling は

（角）のろのろ臥法（ちくま）貝画（河）図画島工作（集）流し絵（新）海画・衰彩画

などのさまざまな訳がでてくる。

次の **Stretching**（引き伸ばす）は **sketching**（スケッチすること）をふまえる。

（角）のびのび臥（ちくま）蛤作（河）躁病法（集）伸び絵（新）腺病画

Fainting in Coils（とぐろをまいて気絶する）は **Painting in Oils**（油絵）。

（角）とぐろ臥（ちくま）捻努細工（河）ガマブラエ＝ガマの油で絵を描く（集）糸釣り絵（新）遊彩画

ところでこの箇所では絵画に関係づけて訳したのは仏訳だけで、独訳と露訳は全く異なった意味を与えている。仏訳を最初にみると、Drawling は Lésiner（けちけちする）と訳す。これは dessiner（デッサンをする）にかけている。Stretching は Troquer（交換する）と訳す。これは croquer（クロキーに描く）を暗示する。さらに Fainting in Coils は Feindre à la Marelle（石蹴りするふりをする）と訳して Peindre à l'aquarelle（水彩で描く）にひっかける。勿論完全ではないにせよ、これらの訳は原文の意図には沿っていると言える。それにたいして独訳はどういうわけか、Drawling を Marterhatmich と訳した。もちろんこんなドイツ語は辞書に登録されてはいないが、Marter が拷問とか苦難と言う意味だとすれば、「拷問・苦難が私を襲えよかし」とでもいう意味になるのではないか。一応そう理解してその先を見れば、Stretching や Fainting in Coils の訳語であるべき語がいずれもそうした意味のもとに統一されているように思える。

Zusammenquälen, Abmühen, Kahldehnen und Bruchlächeln（意味はともに苦しむ、あくせく働く、はげが拡がる、破壊を笑いのめす）

従って独訳は全く関係のないものに化している。その点では露訳も同じだ。露訳は Drawling を **Мать и Мачеха**（ふきたんぽぽ――これは薬用植物）となっている。さらにそのあとには **Триконометрии** と **Физиономии** という言葉が続く。**Триконометрии** は恐らく **Тригонометрии**（三角法）のことだろう。**Физиономии** は観相学のことで、いずれにせよ原文とは全く関係がない内容になっている。独訳にせよ、露訳にせよ訳しかねてそうしたものに逃げ込んだのかどうかわからないが、まあ、日本での翻訳の忠実さというものが逆に浮かび上がるとも言えるだろう。

Ⅲ　諺など、内容と形式の結合がより強いもののパロディーの

翻訳はこれまた困難だ。

Take care of the sense, and the sounds will take care of themselves. (A・W/ II 125)

これは次の諺の言い替えだ。

Take care of the pence, and the pounds will take care of themselves. (一ペンスを節制すれば、おのずと大金は集まってくる)

キャロルはpenceをsenseに、poundsをsoundsに換えることで、パロディーとした。いかにもイギリス人らしい処世訓的世間智の意味から、文学的なものに換えた。意味に気をつければ、おのずと言葉の響きはやってくるというのだ。これは内容としてはたいしたことはないが、翻訳は難しい。こんなにうまい具合に全く同じ文章がpをsに換えただけで、意味が換わってしまうなどということはそうあるものではない。そこに機知が潜むが、翻訳となるとこれは困難極まりないだろう。ではこの困難に日本の訳者はどう挑戦したか。

(角) 意味に気をつけよ、さすれば音は自ずからきまる

(ちくま) 遠からん者は音にも聞け、近くば寄って意味を見よ

(河) 意味をだいじにせよ、そうすれば音は自分で自分をだいじにするであろう

(集) ことばの意味に気をつけなさい。そうすりゃ声も正しく出てくるよ

(新) 以心伝心、声は二の次

全体として諺という形式を何とか保ちたいという工夫が現れているようだ。とくに角川文庫、ちくま文庫、新潮文庫にそれが明らかだが、傑作なのはちくま文庫のものだろう。これは万人周知の武士の名乗りのパロディーになっている。「目にも」を「意味を」に換えた。厳密にいえば、原典の意味と正確に対応はしないかもしれないが、しかし機知の創り方においては十分原典の意図をつたえているといえる。新潮文庫もまた慣用句をうまく生かして見せた。

仏訳、独訳、露訳は大体おなじようだ。

(folio) Occupez-vous du sens, et les mots s'occuperont d'eux-mêmes.

(Insel) Sorge dich nur um das Was, und das Wie kommt von selbst!

(Nauka) думай о смысле, а слова придут сами

Ⅳ　慣用句を利用したしゃれ

これは『鏡の国のアリス』からだが、羊とともに小川をアリスがボートを漕いで下って行く。羊がカニを掴まえないようと注意する。アリスにはその意味がわからない。文字通りカニととる。両者の会話は各自の理解の線に沿って進行する。そこにこの箇所の面白みがあるわけだが、オールを漕いでいて、カニを捕まえるという意味がわからないとここの面白みは解らないと言うことになる。

That was a nice crab you caught! (A・G/ V 265)

(角) どえらくかにをつかまえたものさ(オールをこぎそこね

たこと)

(福) たいそうみごとにかいを取られたね！

(ちくま) ほれ、蟹の横這いじゃないか！

(新) そら、カニさんにわらわれた！

(偕) みごとにかいをとられたもんだね

catch a crab とは慣用句で漕ぎ損ねてオールが水にひっかかることをいう。水中のカニがオールを離さないという戯言からきたものだろうというが、裏の意味だけを表現したのではそのあたりのニュアンスは伝わらない。ちくま文庫、新潮文庫の訳者はその点に気をくばったものだろう。なお、仏訳、独訳はそのままに訳している。

(folio) Tu avais attrapé un bien joli crabe

(Insel) Da hast du aber einen schönen Krebs gefangen

ただフランス語やドイツ語にはこのような慣用句がないから、言い替えには問題がないとしても、独仏の読者には正確な意味は伝わるはずもないだろう。言語構造の近親性が逆に翻訳において、工夫を欠くということの一例がここにあるといえる。一方露訳では、そのような点を考慮してだろうか、間接的な表現の理解困難を避けて、端的な罵りに変えた。

(Nauka) Ну и ворона!

Ворона は烏のことで、ときに阿呆という罵りにもなる。つまり露訳はそのものずばりで羊の皮肉を直接的に「阿呆！」とすることで、テキストを一挙に読者に近づけたといえる。

V　一種の連想ゲーム的言葉遊びにおいて

『不思議の国のアリス』第七章に浮かれネズミと帽子屋と眠りネズミとアリスが茶会をしている。その時のネムリネズミが井戸の底で生活している姉妹の話をする。姉妹は絵を習っていて、Mという字のつくものなら、なんでも描くといって、Mで始まるものをつぎつぎにあげる。

everything that begins with an M....such as mouse-traps, and the moon, and memory, and muchness (A・W/VII 102)

これは一種の連想ゲームといっていいだろう。このような言葉遊びもまた直訳はほとんど不可能だ。頭文字Mと意味のふたつが日本語においても一致することはほとんどないからだ。そこでこの場合、一番無難なのは英語の発音をルビにして、日本語による意味につける。あるいはいっそのこと、英語をそのままつける。たとえば、

(集) Mで始まるのは、たとえばネズミとり(マウス・トラップ)、お月さん(ムーン)、記憶(メモリー)、どっさり(マッチネス)など

(角) Mの字で始まるものは、みんなです・・・たとえば鼠とり(mouse-traps)月(moon)記憶(memory)それからまあまあ(muchness)などです

訳者によっては、そのような抜け道を潔しとしないひともいる。そこでMのかわりにたとえば「ね」をもってきて、それで統一することにする。これなら全く問題はない。

(ちくま) ねの字ではじまるものはぜんぶです・・・たとえば鼠捕り、ねぼすけ、念力(ねんりき)、ねほりはほり

（河）ネではじまるものならなんでも・・・たとえばネズミトリとか、ネムノキとか、ネンリキとか、ネッキリとか

この場合、「ね」で始まる言葉のどのようなものを選ぶか、センスがとわれることになるだろう。それならいっそのこと、Mで統一し、しかも意味をもすくい上げる工夫をしようではないかというわけで、一肌ぬいだのが、矢川訳だ。

（新）マのつくものならなんでも・・・まりつきネズミだの、まんまるお月さんだの、孫の手だの、まるごとだの

さすが意味が完全に一致とまではいかないが、極力近似値を創ろうと努力している。いうまでもないことだが、このような場合の連想ゲームにはなんらかの機知が必要だ。その点で訳者それぞれの工夫がみものだ。

仏独露訳の場合も全く同じことが言える。

フランス語はａで、ドイツ語はｓで、ロシア語は原典に忠実にｍで統一した。

(folio) a→ des attrape-mouches（はえとり草）, des astres（星宿）, des affections（愛情）, des à-peu-près（いい加減のこと）

(Insel) s→Sichelbein（鎌状足）und Sonne（太陽）und Seelsorge（魂への配慮・司牧）und Selbstheit（自己自身）

(Nauka) m→мышеловки（ネズミ捕り）, месяц（月）, математику（数学）, множество（多数）

以上の訳のなかで露訳は結構忠実に訳しているようだ。また仏訳でも、ネズミ捕りとはえとり草との類似のほか、天体、抽象語、数量詞をならべるなど、原典の精神を重んじている訳しぶりといえる。

Ⅵ　全く奇想天外の造語詩への挑戦

キャロルの作品の中に出てくる詩のなかでも、特に翻訳家にとって手ごわいのは、『鏡の国のアリス』のジャバウォッキ JABBERWOCKY という詩だろう。これはまったくの造語詩だ。キャロルは旅行カバンのように二つの概念をひとつの言葉のなかにつめこんだような言葉で作ったといっている。まるでブロックで造ったような詩だ。従って、それに対応する訳語などあるわけもないのだから、これは結局、訳者が自信の考えでつくるほかはないだろう。ここではとりあえず、原詩の最初の一節だけをあげる。

"T'was brillig, and slithy toves
Did gyre and gimble in the wabe:
All mimsy were the borogoves
And the mome raths outgrabe (A・G/Ⅵ 276)

この詩はなお続くのだが、第一連が特に難解なのでこれをあげるのにとどめたわけだ。この詩の意味については、幸い作品のなかに解説があるのであるていどは推測がつく。とにかく言葉をブロックのように結び付けているので、そのブロックの単位からしてときほぐしてゆかねばなるまい。まず最初の brillig というのは説明によれば、brilliant と broiling（肉を炙る）の合成語で、輝かしい肉を料理する時というので、午後四時ごろを指す。Slithy

は lithe and slimy つまり lithe（しなやか、柔軟）に slimy（泥まみれの）を合成、ぬるぬるして柔軟なと言うほどの意味。Toves は badgers（穴熊）lizards（トカゲ）corkscrews（栓抜き）のようなものといって、それら三つの特性をもつという。そしてかれらは日時計のもとで生活し、チーズを食べて生きているという。Gyre はジャイロスコープのように回転するものだし、Gimble は gimblet（T字型ねじきり）のようなもの。Wabe は日時計のまわりの草地のこと、mimsy は flimsy and miserable つまり脆い、薄っぺらなそして哀れなということ。

Borogoves は a thin shabby-looking bird with its feathers sticking out all round –something like a live mop（痩せた、みすぼらしい、羽が四方につきでた、モップ雑巾のような鳥）だという。Rath は緑のブタ、mome は from home の省略形、つまり mome raths は道を失った緑のブタだ。Outgrabing はキャロルは outgribingt と言いなおして、それは bellowing（吼える）と whistling（口笛を吹く）の中間でクシャミをするようなものと説明している。

以上を踏まえて拙訳をこころみてみれば大体次のような意味になるかと思う。

輝かしい料理の時、ねばねばした、しなやかな、
穴熊とも、トカゲとも栓抜きともいえるトーブが、
日時計のあたりの草原で、くるくる回っては穴をあける
モップのような痩せ鳥ボロゴオヴはどれもこれも弱っている
そして迷子の緑のブタ、ラースはくしゃみをしていた

さてこのへんてこ極まりない詩の訳やいかんということで以下見てみよう。

（角）あぶりの時にトーヴしならか
まはるかの中に環動穿孔
すべて哀弱ぼろ鳥のむれ
やからのラースぞ咆哮したる
（福）ときしもぶりにく、しねばいトーブが、
くるくるじゃいれば、もながをきりれば、
すっぺらじめなポロドンキン、
ちからのピギミイふんだべく。
（ちくま）あぶりぐれきたりて　ぬらたかなるとなげら（肉を焼く夕暮れがきて、）
前後普角に転し錐しけり
いともかよわれなりしぼろぐろげら
えでたるとんじらほしゃずりけり
（新）ゆうまだきらら　しなねばトオブ（夕方はやく、輝く時、しなしなして、ねばねばしたトオブ）
まわるかのうち　じゃいってきりる（回転して錐のように穴をあける）
いちかよわれの　おんボロゴオヴ（弱ったぼろぼろのボロゴオヴ）
ちでたるラアス　ほさめずりつつ　（家を立ちいでた緑豚、ほえ、くしゃみしつつ
（偕）　そはあぶときなり　ぬらなやかなる（それは肉をあぶ

る時なり　ぬめらかで、しなやかな）
トーブらじゃいりぬ　まひろきりして（トーブら回転して入ってきた、広い草原に錐の穴をあけて）
もろじめなるもの　みなボロゴーブぞ
やはなれラースら　ほしゃみえずる（や＝家離れ、ラースら汝ら、ほえくしゃみしてさえずる）
（角）あぶりの時にトーヴしならか（肉を炙る時にトーヴはしなやかに）
まはるかの中に環動穿孔（回って、穴をうがつ）
すべて哀弱ぼろ鳥のむれ（すべて哀れで弱い襤褸鳥の群）
やからのラースぞ咆哮したる（ブタは吼えている）
（福）ときしもぶりにく、しねばいトーブが、（時しも炙り肉の時、しなやかでねばねばするトーブが）
くるくるじゃいれば、もながをきりれば、（くるくる回転し、
すっぺらじめなポロドンキン、
ちからのピギミイふんだべく。
（ちくま）あぶりぐれきたりて　ぬらたかなるとなげら（肉をあぶる夕暮れがきて、ぬらぬらして、しなやかな、とかげのような・穴熊の様な・栓抜きのようなものは）
前後普角に転し錐しけり（まったく無我夢中のさまで、そこら一面穴を開けて回った）
いともかよわれなりしぼろぐろげら（たいへんかよわいお前だったな、ぼろでぐろの毛をもつとりのようなものら）
えでたるとんじらほしゃずりけり（家をでて彷徨い出た豚児らは、吼え、くしゃみをし、あしずりをした）

次は仏訳をみることにしよう。

(folio)

Il etait grilheure; les slictueux toves
Gyraient sur l'alloinde et vriblaent;
Tout flivoreux allaient les borogoves
Les verchons fourgus bourniflaient.

仏訳によれば、grilheure というのは六時ごろ、つまり肉を grilleer（焼く）し始める時間という。Slictueux は souple（しなやか）actif（活発な）onctueux（油状の、滑らかな）の三つが入ったもの。Gyrer はジャイロスコープのように回転するもの vribler は une vrille（錐）のように穴をあける、l'alloinde は日時計から出発する並木道。ここには allée と loin が組み込まれている。Flivoreux は frivole と malhreureux からなる。Verchons は cochon vert（緑の豚）fourgus は fourvoyés（みちに迷った）égaré（取り乱した）perdus（迷った）の三語による造語。Bourniflaient は beugler（牛が啼く）sifler（口笛を吹く）の二つからなる。

以上みてきたところでは、仏訳はだいたい原典に忠実といってよいだろう。もちろん言葉自体は異なるが、精神は受け継いでいる。ただ、原典では二語をカバン語としているが、仏訳では三語の概念を一語にいれている。では独訳はどうか。

(Insel)

Verdaustig wars, und glasse Wieben

Rotterten gorkicht im Gemank;
Sonnenuhr von der Art, wie sie
Gar elump war der Pluckerwank,
Und die gabben Schweisel frieben

Verdaustig というのは 食事を verdaut（消化した）がなお durstig（のどの渇いた）午後四時ごろという。Glass は glatt（滑らかな）そして nass（濡れた）Wieben だ。これは Dachse(アナグマ)のようなものであり、Eidechse（とかげ）のようなものであり、Korkenzieher（栓抜き）のようなもの。Rottern は rotieren で、速く回転する。Gorkicht はすべてコルクをほがすもの、ein Gemank は日時計のまわりの広場だという。Elump は elend（惨めな）と zerlumpt（ぼろぼろの）からなる。Pluckerwank はやせた醜い鳥で、生きたモップのようだ。Schweisel は grüne Schwein（緑の豚）、gabben は vom Weg ab（迷った）であり、frieben は Bellen（吠える）Niesen（くしゃみをする）からできている。それに口笛が伴うという。以上独訳の場合も原典にそくして訳しているようだ。では露訳の場合はどうか。

(Nauka)

Варкарось. Хливкие шорьки
Пырялись по наве.
И хрюкотали зелюки,
Как мюмзики в мове.

Варкарось は варить（煮る）と сверкаться（輝く）からつくられ、午後四時ひとびとが料理をする時刻となっている。Хливкие は хлипкие(もろい)と ловкие(巧妙な)から、шорьки は хорька（臭猫）と ящерицы（とかげ）と Штопора（栓抜き）からの合成語でそのそれぞれの特性をもったもの、Пырялись は прыгали（跳ねた）вертелись（回転した）からつくられる。по наве の нава は направо（右へ）налево（左へ）からつくられており、日時計のもと右にも左にも広がる草原のこと、хрюкотали は хрюкаль（豚が唸った）хохоталь（笑った）から зелюки は зеленые индюки（緑の七面鳥）となる。Мюмзики は鳥であり、в мове（道に迷った）で、その羽は бедные перья（哀れな鳥の羽）のようであり、また веник（枝箒）のようでもある。その鳥のようにうなり笑っているという意味だという。露訳は全体としてかなり簡略化されているように思える。それに緑の豚はどういうわけか緑の七面鳥になっているし、また a live mop（モップの生きもの）が枝箒になっているのもロシア的といえるかもしれない。

まとめにかえて

今回は言葉遊びを中心に問題を考えて見た。これはキャロルの翻訳の場合、とくに中心的部分を占める問題だとしてもそれがその翻訳にかかわる問題の一切であるはずはない。翻訳ということを問題とするならば、さまざまな問題がそこに現れてくるはずである。従って、このエッセイはあくまでもキャロル翻訳の一部分でしかない。それも不十分な一部分であろうかと思う。なにしろ、仏訳、独訳、露訳に関しては一種類しか資料を扱うことができな

かった。この点は批判を免れないところだろう。現行の邦訳についても全体を網羅することはできなかった。従ってこの風景はどこまでも、筆者の小さいレンズに映じたものでしかない、しかし筆者にはそれだけですでに楽しい風景であったことを申し述べて筆をおくことにする。いうまでもなく、いつかまた、この風景をより大きな、そして正確なものにできたらと願っている。

参考文献

楠本君恵『翻訳の国の「アリス」――ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論――』未知谷、二〇〇一年三月

『別冊現代詩手帖　第一巻第二号　ルイス・キャロル』一九七二年六月

（本稿は二〇〇八年七月五日の日本比較文学会創立六〇周年記念九州大会〈九州大学〉におけるシンポジウム「文学の翻訳をめぐって」の発表原稿に加筆訂正を施したものである）